

る。フォアシユテルの解釈では、第四福音書における *step* は「ために」という一般的意味で用いられ、イエスの死は積極的な救済的価値をもつことを示す。だが、この前置詞自体はイエスの死がどのような仕方でも救済的なのかは示さない。一〇・一一、一五と一五・一三の *elbevat tyu qurxy step* という句は、人々を死より救うために父のみこころに従って自分を犠牲にするイエスの愛を示すだけであり、イエスの死の祭儀的性格は示さない。同様に、六・五一c はイエスの派遣、特にその死のもつ普遍的にいのちを与える目的を指し示すだけであり、父への犠牲的捧げ物を示さない。一一・五〇—五二と一八・一四は、イエスの死のもつ普遍的に統合する力を示すのみである。Step tou *zoois* という宗教的な句(一一・五〇、一八・一四)は、十字架のもつ救済的意味を示すが、救いの働きの仕方は告げない。一七・一九は、もしヘブル一〇・一〇とエペソ五・二の光に照らして解釈できるなら、イエスの犠牲的死に言及すると言え、実際には直接の文脈とヨハネ神学全体の光に照らして理解されねばならない。イエスが弟子たちのために自分自身を「聖別する」(*hagiasas*)とは、弟子たちをこの世から神の領域に移し、そこで彼らを守るために父のことばに従って人々に神を啓示するというイエスの働きに第一義的に言及する。かくして、フォアシユテルは *step* テキストはイエスの死の犠牲的解釈を要求しない、イエスの死は第一義的にはいのちを与える愛の行為であり、父の啓示であると言う。

「神の小羊」句については、フォアシユテルは一・二九はイエスの死を犠牲的に理解しうる第四福音書における唯一の箇所とみなすが、一・二九は顕著な仕方では発展させられておらず、単にヨハネ共同体の聖餐式におけるイエスの死の祭儀的解釈を反映するにすぎないと考える。フォアシユテルは、かかる解釈は本来的なヨハネ神学にとって二次的周辺のだと主張する。

さらに、フォアシユテルは、ヨハネ第一の手紙のいくつかの箇所を吟味する。それによると、一・七はキリスト教共同体の祭儀における聖餐式のイエスの血の有する贖罪的力に言及する。二・二と四・一〇 *hagiasas* *tepi tou iudaiou throu* という句は、とりなしもしくは赦しを意味しうるが、贖罪的犠牲をも意味しうるかもしれない。しかし、またもやかかるモチーフは周辺の・二次的であって、キリスト者たちが受洗後におかした罪にたいする著者の牧会的配慮がその契機となっているとフォアシユテルは解釈する。

このようにフォアシユテルの観察によれば、イエスの死の犠牲的評価を要求する箇所はほとんどない。この現象は、福音書執筆の計画においてヨハネはかかるイエスの死理解を強調していないことを示す。ヨハネは、特徴的にイエスの死をその啓示の働きの極点として呈示している。しかし、このことはヨハネは「教会神学」を知らないということではなく、ましてやそれを否定するということでもない。この現象が示すことは、ただ福音書執筆の目的は、ヨハネ的イエスの死を罪のための犠牲として描くことではないということだけである。

以上の解釈からフォアシユテルは、彼のテーゼを覆すような証拠はないと帰結する。すなわち、①ヨハネの救いの神学は、イエス・キリストによるいのちを付与する働きにおける神のことばの啓示に基づく。②イエスの死は、人々への神の愛の究極的啓示であるゆえに、救済的である。このテーゼの①には同意できるが、②には、果して釈義的証拠は充分かという疑問が残る。

イエスの死が、人々への彼の愛と父の愛を現わすことは明らかである。フォアシユテルが言うように、イエスの働き全体が愛のしるしのもとに置かれており(三・一六、三五、五・二〇、一〇・一七—一八、一五・九、一三)、告別話と受難物語(一三—一九章)は、この愛の究極的な啓示として呈示されている。三・一六、一〇・一一、一五、一五・一三、一三・一、一七・二三、一八・八—九、一九・二八—三〇などの箇所は、ヨハネが死において極点に達するイエスの全生涯を世への神の愛の啓示として評価していることを鮮明に示す。フォアシユテルは、イエスの

死において至高に啓示されたこの愛を「救う愛」(saving love)とも「いのちを付与する愛」(life-giving love)とも特徴づける。今、福音書の枠をぬぎにして、一般的に「模範説」(the exemplarist theory)の観点から見れば、十字架はイエスにおける神の愛の啓示によって人々の心を感動させ、彼らをイエスへの信仰、神への愛、そして生き方の改善へと導く。かくして、神の愛は人々を救うと言えよう。だが、福音書に限定する時、フォアシュテルの主張を裏づけられると思われる箇所は三・一四―一七だけであろう。⑨ だが、三・一六が言うことは、世へのイエスの派遣は世への神の愛の表現だということだけであり、イエスの死が特別に神の愛の啓示であるとは明言しない。⑩ ましてや、この愛がどのような仕方で、人の心に働きかけ、救いをもたらすかは示さない。三・一四―一七に限定して、十字架は何を啓示するのかと問うなら、十字架は高擧されたイエスを、すなわち救い主・裁き主を啓示するということになろう。この高擧されたイエスを信ずる者は永遠のいのちをもつ、ということだけが語られており、信者がそれをもつに至るのは、代理的贖罪の犠牲によるのか、神の愛の至高なる啓示によるのか、つまりどのような仕方なのかは、語られていない。⑪

まとめると、フォアシュテルの「救う愛」仮説を支持する積義的証拠は不十分である。第四福音書において、愛の啓示のモチーフは顕著ではあるが、それにさらに特定の救済的機能を与えるのは、行き過ぎであろう。ヨハネは、愛のモチーフをどのような仕方でも十字架は人々を救うのかという「活動方式」(modus operandi)に組み入れていないと思われる。⑫

## 結 論

ヨハネの十字架神学は、救済論的ではあるが、十字架の救済論的「活動方式」に関して限定的ではない。この現象は、ヨハネがそれを知らないことを意味するものではなく、そういう観点からの理解に反対することを意味するものでもない。むしろ、ヨハネは、以後の贖罪の神学の形成と発展のための素材を提供している。

このヨハネの十字架神学の非限定的性格は、おそらく「無関心」ではなく「異なる関心」という観点から説明できる。ヨハネが没頭する興味は、キリスト論、すなわちどのようにイエスが行動し、自分自身について語ったかの描写である。⑬ 既に見たように、このイエスの描写は、イエスは存在論的に父と一つであるというヨハネの根本的信念によって方向づけられている。それゆえ、ヨハネはしるし(signs)という証拠のもとに、地上のイエスに高擧されたキリストを投影することができる。人間的目的には、イエスの地上の生涯は十字架刑において破局を見る。しかし、十字架にかかわらず、いな、まさに十字架のゆえに、ヨハネは十字架につけられたイエスを高擧されたキリストとして描くことができる。なぜなら、彼の理解では、十字架こそはイエスがこの世から父のもとに帰還し、それによって父と共に王座に着き、救い主の権力を付与されるための場であり、イエスが弟子たちをとおしてバラクレイトスの人格においていのちを付与する権力を行使し、かくして啓示・救いの働きの範囲を拡張するための場だからである。ヨハネの眺望では、世におけるイエスの働き全体がイエスのこの高擧された身分の啓示であるが、十字架上のイエスの死はその頂点である。なぜなら、十字架は王座へのイエスの高擧、父の愛、イエスと父の一体性、したがってイエスの真の姿(いのちの付与者かつ裁き主)を極点的にかつ最も鮮明に現わすからである。そして、ヨハネは、人の子を十字架に

上げるという物理的行為の中にイエスの真の姿に関する自己の理解を非常に鮮明かつ効果的に伝える手段を見出す。このために、ヨハネは *ὑπόθεσις* という用語を使用し、*χρόνος* の神学的意味を *δοξολογία* の特徴的使用によって拡大・発展させる。

かくして、ヨハネの十字架神学は、キリスト中心的性格を有する。すなわち、十字架につけられたイエスは、高擧され栄化された主、それゆえ、救い主・世の裁き主である。ヨハネの救済論的関心は、単純である。すなわち、信仰によって十字架につけられたイエスに神の啓示者を見る人々は、永遠のいのちを受けるといことである。言いかえると、ヨハネの関心は、人々は救われるために、たれを信じなければならぬかであって、救いがどのような仕方であられるかではない。ヨハネの目的は、十字架の王座から統治している啓示者イエスに人々を直面させ、人々がこのお方を信じて永遠のいのちを得ることなのである。

#### 註

※ 以下の註解書は、著者名とじりて用いた。

- Barrett, C. K., *The Gospel according to St John* (London: SPCK, 1955).  
 Barrett, J. H., *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel according to St John* (2 vols; ICC 29; Edinburgh: T. and T. Clark, 1929).  
 Brown, R. E., *The Gospel according to John* (2 vols; Anchor Bible 29, 29 a; Garden City, New York: Doubleday, 1966-70).
- Bultmann, R., *The Gospel of John* (Oxford: Blackwell, 1971).  
 Dodd, C. H., *The Interpretation of the Fourth Gospel* (Cambridge: CUP, 1953).  
 Hoskyns, E. C., *The Fourth Gospel* (ed. F. N. Davey; London: Faber, 1961, 2nd revised ed.).  
 Lindars, B., *The Gospel of John* (London: Oliphants, 1972).  
 Marsh, J., *The Gospel of St John* (Harmondsworth: Pelican, 1968).  
 Morris, L., *The Gospel according to John* (Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, 1971).  
 Schnackenburg, R., *The Gospel according to St John* (trans. K. Smith; New York: The Seabury Press, 1980, Vol. I).  
 —, *The Gospel according to St John* (trans. C. Hastings and others; London: Burns and Oates, 1980, Vol. II).  
 —, *Das Johannesevangelium* (Freiburg: Herder, 1979, 3. Teil).  
 Strachan, R. H., *The Fourth Gospel* (London: SCM, 1941).
- ① *Ἰστορία τῆς ἀποστόλου Ἰωάννου, ἰστορία τῆς ἀποστόλου Ἰωάννου, ἰστορία τῆς ἀποστόλου Ἰωάννου, ἰστορία τῆς ἀποστόλου Ἰωάννου* の邦訳を、神学雑誌『神学』に掲載された。
- ② *Word of the Cross: salvation as revelation in the Fourth Gospel* (Rome: Biblical Institute Press, 1974) 61. n. 14.  
 「神の小羊」句 (一・二一九) *ἀμνὸν ἑστῆρα* ナキヌマ (水・五一一' 一〇・一一' 一四' 一四' 一三三' 一一・五〇' 五一一' 一八・一四' 一四・一九)
- ③ *Ἰωάννου τῆς ἀποστόλου Ἰωάννου* Cf. D. W. Wead, *The Literary Devices in John's Gospel* (Basel: Reinhardt, 1970) 30-46; R. Shedd, 'Multiple Meanings in the Gospel of John,' *Current Issues in Biblical and Patristic Interpretation* (ed. G. F. Hawthorne; Grand Rapids: Eerdmans, 1975) 247-58.
- ④ Cf. Wead, *Literary Devices*, 36.
- ⑤ Cf. W. Thüsing, *Die Erhöhung und Verherrlichung* (Münster: Aschendorf, 1960) 3-12, 23.
- ⑥ *Ibid.*, 31-3.

- ① Cf. Forestell, *Word of the Cross*, 61-5; F. J. Moloney, *The Johannine Son of Man* (Rome: Ilerbia Ateneo Salesian, 1976) 61-4.
- ② Cf. Forestell, *Word of the Cross*, 62. n. 20.
- ③  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$   $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  \*  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  の世の有力者本に欠けようだが、重複誤写かたしか決定困難である。
- ④ Cf. Moloney, *Johannine Son of Man*, 177.
- ⑤ Cf. Brown, 610; Thising, *Erhöhung und Verherrlichung*, 234.
- ⑥ Cf. Schnackenburg III, 55.
- ⑦  $\rho\alpha\upsilon\lambda\circ\ \alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$   $\rho\alpha\upsilon\lambda\circ\ \alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  三・一六、使徒七・五五、 $\rho\alpha\upsilon\lambda\circ\ \alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  一・一一。
- ⑧ Cf. Bultmann, 424.
- ⑨ Cf. Schnackenburg II, 382.
- ⑩  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  人の子に神と同等者として扱われる。 Cf. Moloney, *Johannine Son of Man*, 179-85.
- ⑪ Cf. E. Käsemann, *The Testament of Jesus: a study of the Gospel of John in the light of Chapter 17* (London: S. C. M., 1968) 20.
- ⑫  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  受難物語 (一八一―一九章) と復活物語 (二〇章) は密接に結合してある。 Cf. Bultmann, 632-97; Dodd, 423-43.
- ⑬ Cf. R. E. Brown, 'The Passion According to John: Chapters 18 and 19,' *Worship* 49 (1975) 127-8.
- ⑭ 神に預かることには神顕現に反対である (タリチス二・四六、八・一八、一〇・九、黙示録一・一七)。 Cf. Bultmann, 639; Brown, 818.
- ⑮ Cf. E. Haenchen, 'History and Interpretation in the Johannine Passion Narrative,' *Interpretation* 24 (1970) 205: 'thus the narrator allows Jesus to leave this encounter as the moral victor.' A. Dauer, *Die Passionsgeschichte im Johannes-*evangelium** (München: Kösel, 1972) 249: 'als überlegener Sieger wird er aus dem Verhör geschickt.' 同、ヤコブ・ワトソン、*Jesus und seine Passion* (一八・三三―三八、一九・九―一一)。 Cf. Dauer, *Passionsgeschichte*, 253, 267; Brown, 868.
- ⑯ (1) 一八・二八―三二 (2) 一八・三三―三八 a (3) 一八・三八b―四〇 (4) 一九・一一―一三 (5) 一九・四一―八 (6) 一

九・九―一一 (6) 一九・一一―一六 a

⑮ Cf. Brown, 863; M. de Jonge, 'Jesus as Prophet and King in the Fourth Gospel,' *Ephemerides Theologicae Lovanienses* 49 (1973) 175. n. 62.

⑯ Cf. Dauer, *Passionsgeschichte*, 261; Haenchen, *History and Interpretation*, 212.

⑰ Cf. I. De la Potterie, 'Jesus King and Judge according to John 19: 13,' *Scripture* 13 (1961) 106.  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  王權を行使する者 (一三三・ホーニール、 Cf. 二二二・ホーニール、二六三―二六四)。

⑱  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$   $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  の神聖さ (一一・一三) の「ホーニール…… $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  の王として「受難される」に按照してあることを示す。 Cf. Brown, 890.

⑳ Cf. Moloney, *Johannine Son of Man*, 204-7; Dauer, *Passionsgeschichte*, 264; De la Potterie, *Jesus King and Judge*, 106; Dodd, 437.  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$   $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  の *ben adam*  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$   $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  の *ben nasha* が、「人」を意味するよりも知られてきたものである。 Moloney, *ibid.*, 205-7.  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  一九・五の *the Man*, の用法と第四福音書における *the Son of Man* の用法の間には大きな類似点や隠れ点がある。

㉑ Cf. Dodd, 437.  
㉒ 「 $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$ 」が *gabh*  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  *gb*; 'to be high, protrude' であることは注記してある。 Cf. Brown, 882; De la Potterie, *Jesus King and Judge*, 109.

㉓ De la Potterie, *ibid.*, 97-111.  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  *ikdrosu* が 'Pilate installed Jesus as Judge' の意味と類似するが、他動詞で語尾の  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  は不必要な巧妙さを持込込むようである。見られる。 Cf. Hoskyns, 524.

㉔ 序 (一九・一六―一八) 五の *ヘヨノード* (1) 一九・一九―二二 (2) 一九・三三―二四 (3) 一九・二五―二七 (4) 一九・二八―三〇 (5) 一九・三一―三七) 結ぶ (一九・三八―四二)。

㉕ Cf. Brown, 912.

㉖ Cf. Brown, 898, 916-7; Dauer, *Passionsgeschichte*, 274; M. L. Appold, *The Oneness motif in the Fourth Gospel* (Tübingen: Mohr, 1976) 136. *éaurou*  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  'ethical dative' と *éaurou*  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  'instrumental dative (= *di'* *éaurou*)' と区別されるべきである。  $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$   $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  の省略が、 $\alpha\theta\epsilon\sigma\tau\alpha\iota$  の意味的役割である。



⑤ Müller, *Heilsgeschehen*, 74. 45' 高華・栄化としてのイエスの死の描写、および受難の決定的時点をあらわす *ἡ ὄρα* 'ώρα' の用法は第四福音書のみならず十字架の「犠牲」(Gefalle)を示すに措論する。

⑥ *ἄρα* 'キリストは'以下を含む——イエスは世のこの世のために自分の肉を与える(六・五一) 'イエスはその羊のため(一〇・一一・一五)'あるいはその友のため(一五・一三)命を捨てる'、イエスは民のため、あるいは国民のため(一・五〇'五一'一八・一四)'、イエスは弟子たちのため自分自身を聖別する(一七・一九)。

⑦ *Heilsgeschehen*, 73.

⑧ *Ibid.*, 73, 113-4.

⑨ *Ibid.*, 56-7, 110, 114, 124, n. 402. Cf. Forestell, *Word of the Cross*, 2.

⑩ *Ibid.*, 133. Forestell, *ibid.*, 75-6. 45' *ἄρα* は言語学的だが「ため」のみなふた「かわり」を意味していることを認め、新約聖書外の文献では祭儀的行為としての代理的死のいうてはほとんど使用されないと述べる。だが、このことか *ἄρα* は新約聖書では「かわり」を意味しないう婦結するといはざるなら。実際、新約聖書はしたが、イエスの死を代理の意味での *ἄρα ἡλίου*, etc., として特徴づけようとするべき'、かかる解釈は十分な言語学的背景を根拠として論ずる者たふあさる。 Cf. L. Morris, *The Apostolic Preaching of the Cross* (London: The Tyndale Press, 1972) 62-4; R. E. Davies, 'Christ in our Place——The Contributions of the Prepositions,' *Tyndale Bulletin* 21 (1970) 71-91.

⑪ *Word of the Cross*, 82, 193-4. Forestell, *ibid.*, 194. 30 Brown, 440 45' *ἄρα* *τὸν λαόν* 'よびをけやハリシタル'はなく gloss 'よびをさる'。トヒマンは次のように言う'、'otherwise, if the phrase was part of the original text, we should probably understand *hyper*, not in the sense "for, in behalf of" (normal in John), but in the sense "in place of"。'。この句がオリシタルならは、贖罪の神性を暗示するといふべき。しかし、トヒマン自身は認めるように、この句は gloss 'よびをさる'本文批評上の証拠はなす。 Bultmann, 411, n. 1. 45' *ἄρα* は 'in place of' の意味である' Schnackenburg II, 349. 45' この句はイエスが死んで賣られる神の民(五二節の「神の子たち」)という概念を導入するため用いられるべきである。だが、かかる見解をよび *λαός* 'よびを用語が困難となるかもしれない。' *λαός* はルカの用語である'、ミンネピタ一一・五〇より一八・一四で用いられるたふあさる。

⑫ *Word of the Cross*, 77-81, 194.

⑬ *Ibid.*, 194.

⑭ *Ibid.*, 157-66, 194. 「犠牲」はいろいろな仕方と理解しよう用語だが、Forestell, *ibid.*, 165. 45' *ἀγνόν* 'それは代理的償いもいへば刑罰代受という性格をもち、むしろ「神との交わりに入るための効果的手段を人間に与える神の主導権」を意味する。' *Ibid.*, 195.

⑮ だが、超越のキチーンは犠牲的解釈を指し示すとみなせるかもしれない。このキチーンは「神の小羊」歎呼(一・二九—三四)' *ἀγνόν* (一一・一三—一五)' 五千人の供食(六・一一—一四、二二—二七)' *ἀγνόν* 告別談話(一三・三一—一七・二六) *ἀγνόν* 聖書(一六・一三—一七) *ἀγνόν* 見られ。 Cf. R. Kysar, *The Fourth Evangelist and His Gospel: an examination of contemporary scholarship* (Minneapolis, Minnesota: Augsburg, 1975) 137-40. 三・一六より一七・一七が犠牲的意味でのキチーン型論の観点から解釈するといふ可能である。しかし、これらの箇所はミンネが意図的ないキチーン犠牲性及びよびのかわりなす。 Cf. Brown, 147, 917, 953; Forestell, *Word of the Cross*, 76, n. 74, 194, n. 14.

⑯ *Ibid.*, 195.

⑰ *Ibid.*, 88.

⑱ Forestell, *ibid.*, 114-5. 45' 45' の箇所はよびの言'。 In 3. 14-17 the juxtaposition of ideas in the present form of the text associates faith, eternal life and salvation with the cross and the love of God for men. Jesus elevated on the cross has been given by God to men as *ἀγνόν* *συντηράς*, like the brazen serpent in the desert. Those who by faith see here the manifestation of God's saving love will possess eternal life and will escape destruction and judgment.'

⑲ Forestell, *ibid.*, 76, n. 74, 194, n. 14. 45' *ἀγνόν* ' *ἔδωκεν* は排他的に十字架のみと言及せず、イエスの死を含む受難全体を包括する。

⑳ 45' *ἀγνόν* 'キチーンは、イエスの啓示のほうへの側面である神の正義を認識していなうた思われる。イエスは地上の生涯を通じて神の正義を知らせ(一一・一三—一七、一八・二二—二四、一一・三三、三八、三三・三六)のみならず、死にわたるもそれを現わす(一六・八一—一一・三三、おまひ受難物語、特に一八・二八一—一九・二二)流れる「血」キチーンを参照。 Cf. Dauer, *Passionsgeschichte*, 241-2。十字架の啓示は、おまひを含む。

⑩ トンヌマンの十字架解義と臨在の纏纏の事、E. Schweizer, 'Zur Interpretation des Kreuzes bei R. Bultmann,' *Aux sources de la tradition chrétienne* (M. Goguel Festschrift; Paris, 1950) 237. 44' 世の愛の終に到るトンのトンヌマンの十字架解義に於て、身代りかへた犧牲の概念を扱き、トンは神の愛の終に於ては意味をなす事を知り得。Forestell, *Word of the Cross*, 196. 44' 上のトンヌマンの主張を自分のキリストと重大な神学的異議を提起する事は能はるが、それによつてキリストは贖罪の賠償的であることと救済的であることとを区別する。

by an effective exercise of divine love and it is appropriated by men only by a faith which is exercised in the effective practice of fraternal love.' Cf. Ibid., 197. 彼の見解は、普遍の同意を得る必要はない。議論は、神、罪、救済の関係を救済論と神学とで理解する必要がある。これは本稿のキリストの範圍を超える。

⑪ Cf. D. M. Smith, 'The presentation of Jesus in the Fourth Gospel,' *Interpretation* 31 (1977) 367. 44' 44' christology としての用語は、その presentation of Jesus の意味を、キリストの神性を指す。

(日本新約教団ロイノニアキリスト教会牧師)